

宮様のお食事はさぞかし豪華、と思いきや…？

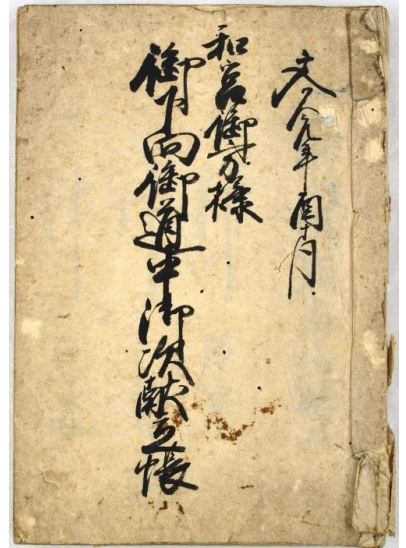
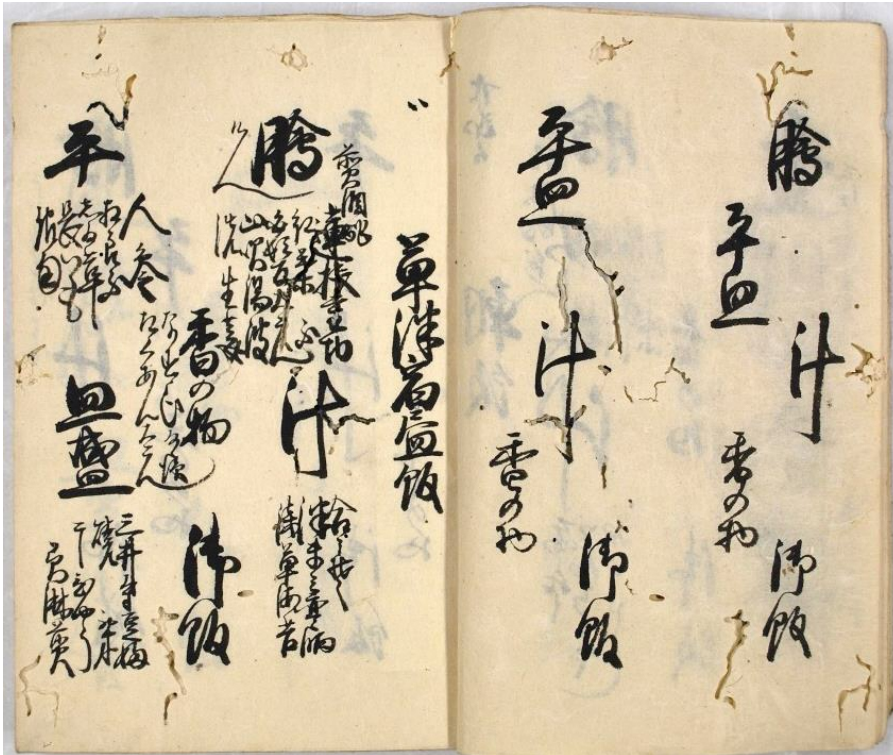
かずのみやおんかたさま

ごげこうごどうちゅうおんつきこんだてちよう

和宮御方様

御下向御道中御次献立帳

(草津市蔵)



左：「草津宿屋飯」部分
上：表紙

幕末、内憂外患の社会情勢にあつて、幕府と朝廷の融和策として孝明天皇の妹君・和宮（かずのみや、親子内親王）が十四代徳川家茂へと嫁ぐ一行が江戸へと下っていきました。一行は文久元年(1861)10月20日に京都を出立し、中山道を通つて25日間の行程で江戸城へ到着。道中では、沿道警護29藩、随同警護12藩、その行列の人数は3,000人近くであつたといわれ、このようすを当時のうばがもちや当主は「誠ニ前代未曾の御通輿」と「日用雑記」に記しています。

このときの道中の食事については、大津宿から板橋宿までの各宿に対して「御料理物宿々有無書上達書」の提出が命じられ、各宿では「海魚并塩肴」「川魚」「鳥類塩鳥」「干肴」「乾物類」「豆腐・蒟蒻・小麦・蕎麦粉之類」「青物類」を書き上げて報告しています。草津宿でも例にもれず書き上げて差し出していますが、実際の献立はどのようなものであつたのでしょうか。

それをうかがう資料が「和宮御方様御下向御道中御次献立帳」で、和宮通行の全行程における食事の献立が記されています。この献立帳は膳

所藩の賄いに携わつていたと推察される「御賄三番組 西村藤八」が書き綴つたものです。

草津宿に立ち寄つたのは10月22日で、田中七左衛門本陣において昼食をとりました。一汁四菜で、膾は蓮根重切、椀物は紅葉麩や山吹湯葉、平は椎茸や銀杏、皿盛は三井寺豆腐で、御飯、汁物、香物がついています。先に提出を求められた書上げとは献立が大きく異なっていますが、提出した時期と通行時との季節の違いによるものでしょうか。また、献立帳を順に繰つていくと、「汁」が白味噌や赤味噌と異なり、地域による食文化の違いなどもうかがえます。

中山道最大の通行である和宮の行列に際して仕立てられた食事というと、豪華絢爛、華やかな食膳を想像しますが、草津宿の献立をみる限り、決してそうではなかつたようです。都を離れたことのない数え年16歳の少女が、未だ見知らぬ土地へと嫁いでいく不安や淋しさを心中に、口にする食事の味はいかばかりであつたのでしょうか。

(令和5年1月・草津宿街道交流館 八杉 淳)